

笹川スポーツ財団スポーツボランティアリーダー活動報告
発表（その1）ボランティアリーダー・土田一見

土田　　スポーツボランティアは、私のライフワークです。2002年のサッカーワールドカップが始まりでした。いろいろな大会を見て、サッカーのワールドカップと東京マラソンの大会が特にボランティア態勢や組織運営の面で印象に残っています。

この二つに共通しているところは、しっかりとしたボランティアの事務局態勢が調っていることです。例えば、東京マラソンで言えば、ボランティア参加者に対して、「～あなたの笑顔がチカラになる～」というテーマを掲げているのがすばらしいです。そして、大会意義やボランティアの必要性を唱え、DVD放映によって感動場面を描くことでボランティア意識を喚起します。

一方、活動内容に関する活動マニュアルをもらいますが、さらに活動者名簿が付いてきます。活動マニュアルや活動者名簿は、私たちボランティアにとって視覚に組織の規模を訴えるという力があります。

まだ認知度の低いスポーツボランティアですが、その魅力は将来にわたって無限大だと思います。私自身は、全国各地のボランティア情報を多く取り、特に、ボランティア組織の活発な地域からの情報を得ることで、スポーツボランティアの必要性だけでなく、組織化の必要性など、いろいろな方面へ働き掛けていきたいと思っています。

もとより、地元の北海道ではスポーツボランティアの普及活動は、個人としても微力ですが、これからも精いっぱい応援していきたいと考えています。また、今後は、一日も早く全国各地に多くのスポーツボランティア組織が誕生することを願ってやみません。スポーツボランティアは、何よりも自分が楽しむことも大事であって、そのうえでしっかり与えられた業務をこなして大会を支えるものです。

一方で、多くの人との出会いも縁ですから、できるだけ仲間の輪を広げ、いつか、その感動場面や活動場面を語り合うことができるのが、私の望む理想のスポーツボランティアの姿です。

鹿野 今日の話は、極めて小さい現場の話です。東京マラソンで私が担当したのは、フィニッシュの手荷物返却係です。

朝は、「集合。おはようございます」で始まります。指示・命令系統の話がよく出てきますが、原則として私は、始まってからはサブリーダーにしか指示を出しません。私のチーム（20名程度）は、工夫をして「赤組、青組、黄色組」と色が付いていますのですぐにお互いがわかり、込み合う現場でも同じ仲間を確認し合う必要がありません。これは、いい効果や競争意識・責任感が出てきて、みんな頑張ります。

そして、場所を現場に移しリハーサルをするときに必ず付け加えて伝えているのが、「君たちは選手で、ランナーと一緒に汗をかいてくれ。同じ活動をしているメンバーの足を引っ張るな。遅れを取るな」ということです。

私がボランティアで行ったときに、「ボランティアがだめだとイベント全部がだめになる」という話をします。また、リーダーが活動するにはいろいろな条件があると思いますが、私が心掛けているのはボランティアのモチベーションです。モチベーションは、活動しやすいようにリーダーが作っていくものです。簡単になっても、「今日は、俺たちは何をしに来ているのか。俺たちは何を目標にしようか」ということを伝えるべきだと思います。そして、常に全力発声をしていれば、いつの間にかみんな全力疾走をするようになり、時間も無駄に使わないようになります。

「ボランティアは楽しい」という話がたくさん出ていますが、元日本財団の曾野綾子会長は、「ボランティアが楽しいうちは、まだ本当のボランティアではない」と言っていました。もちろんボランティア活動のすべてが苦しかったらとてもできないと思います。私は、リーダーであれば、1年に一度は苦しくて楽しくないボランティア活動をすることにより、さらなるリーダーとしての成長を新しい視点から学べると思っています。

山口 今日のパログラムに、「全国のリーダー、ボランティア組織が一堂に集結し、熱い議論を交わす」と書いてあります。これが、今日はできたと思います。

今日のサミットで、笹川スポーツ財団もいろいろなスポーツ団体からの情報を登録ボランティアに提供し、コーディネートしている動きが出ていることを知りました。また、単に地元だけではなく、スポーツボランティアが各地方に出掛けて活動することを支援する全国スポーツボランティア情報システムのようなものが必要になっていることも理解できました。

国際的なイベントやオリンピックなどに出掛けている人もいる現状は、まさにボランティアの「スポーツツーリズム」ととらえることができます。スポーツツーリズムは、スポーツイベントに参加しながら一緒に観光をします。同じように、スポーツボランティアとして活動し、地域のいろいろなものを食べたり、地域の人と交流するというボランティアツーリズムも生まれてきています。

私が日ごろ参加している行政主体のセミナーでは、質問やディスカッションは、行政に対して、「こういうふうにしてほしい」という不満がたくさん出ますが、今日のサミットでは、「もしだめだったら自分たちでやろうよ」という声が出て、ささえるスポーツを前向きに楽しむことができる経験豊かなスポーツボランティアが非常に増えてきたことを証明してくれました。

今回は第一回目で、「障害者スポーツについてディスカッションが足りない」などの課題も指摘されましたが、ぜひ、またの機会を持ち、交流を深めたいと思います。

追加質疑応答

質問者(1) 私は、「RUNNET（ランネット）」をよく見て、各主催者側に、「ボランティアとして参加したい」という意向を伝えると、「もう陸連に頼んであるからいいです」「大学の人に応援してもらっているからいいです」「社員でやっちゃいますからいいです」といった返事が多く、ボランティアの参加をあまり歓迎せず、ボランティアは面倒臭いと思っている主催者が多いと感じます。

私たちは草の根であり力がありませんから、力のある人の行動でボランティアへの理解を広げてもらえれば、もっと私たちの活動の場が広がります。

新出 私自身もそう思っていますので、まずは何でも自分たちが手作りでやるようにしています。一般的に、主催者も記録係や荷物係や給水係もみんな手作りでやろうとします。

私は、「その手作りというのが、参加者から非常に好まれている」と聞き、非常にうれしく感じました。それは、だんだん大きくなると、審判員もボランティア、主催者もボランティア団体が運営し、イベント全体がボランティアの大会になるからです。

二宮 今出た質問は、マッチングの問題です。一つの短期的な解決策は、ボランティアバンクやボランティアサイトなどのマッチングシステムをきちんと作り上げることです。また、中・長期的には、基本的な教育が非常に大事になります。私は来年度から「ボランティア論」という授業を担当しますが、そういう教育の場面を通して、スポーツだけに限らずいろいろな場面で考え方の指導をやっていかなければいけません。これは、短期的に終わる問題ではなく、中・長期的に継続しなければ効果が出てきません。

山口 経験豊かなボランティアが増えてきて、「地元だけではなく、いろいろなところに行ってやりたい」という新しいニーズが出てきました。私は、いろいろな地域スポーツイベントやビッグイベントに行きますが、地域のイベントの場合は、どちらかというと手作りで、広告代理店に任せるのではなく、自分たちでボランティアも組織化することが、うまく活性化につながるのは事実です。

経験豊かなボランティアが、どこに活動範囲を広げることが可能かという、一つは「RUNNET」です。市民マラソンやランニングイベントは、給水や誘導などある程度やるのが決まっていて、受け入れやすい環境があります。同時に、行政やイベント主催者には、スポーツボランティアの本当の意義と価値を認めてもらい、うまく使ってもらいたいと思います。

質問者(2) スポーツ関連予算の上積みで、医療費の削減効果が出たという事業の計画や結果についての資料があれば教えてください。先日、スポーツライターの玉木正之さんが、MBSの「ちちんぷいぷい」という番組内で「オーストラリアで、スポーツ関連予算を上積みして、地域でスポーツ

活動を行った結果、心疾患などが減って医療費削減につながった例がある」という内容のことを話していました。

山口

今、どこの国も悩んでいるのが、肥満の増加です。特にオーストラリアは、肥満児が非常に増えています。これは、先進国だけではなく、例えば韓国でも少子化の影響で北京でも肥満児が非常に増えています。これは、運動やスポーツだけではだめで、オーストラリアやフィンランドでは栄養と一緒にやるプログラムに取り組んで医療費削減効果を狙っています。

情報源としてアクセスしたらいいのは、オーストラリア政府の「ASC（オーストラリアン・スポーツ・コミッション）」でという政府のスポーツ機関です。最近の研究所は全部公開されていて、多くの報告書が公開されています。

また、ニュージーランドがもっと成功していて、「スパーク（SPARC）」という政府の機関で、医者が運動処方をするプログラムを実際にやっています。ここでは運動処方をして、処方箋をもらって地域のスポーツセンターに電話をすると、「どこに行きなさい」と指導してくれる素晴らしいプログラムをやっています。

質問者(3)

「スポーツボランティアを通じた観光」の話がありましたが、去年の夏に近畿日本ツーリストから、「ボランティア活動しながら観光旅行をする」という企画の話がありました。

私は、実際にアテネオリンピック・大阪陸上・長野オリンピック・ワールドカップをやりました。この中で一番苦労したのは、アテネオリンピックのときの宿泊で、ネットワークもありませんでした。ボランティアのネットワークの中で、「私のところに泊まれるよ。ホームステイをしてもいいよ」などのかたちも含めて、スポーツボランティアのネットワークをもっと包括的なかたちで組み込めたらいいと思います。

山口

海外に出掛けて世界一周などをする日本人のサイクリストが多くいますが、彼らをサポートするアドベンチャーサイクリスト協会が大阪にあります。ここでは海外で何かトラブルがあるとすぐにサポートができる態勢ができています。スポーツボランティアも、メールマガジンやメーリングリストなどの情報共有ツールがますます必要になってきていると感じました。

質問者(4)

「観光」というキーワードが出ています。地域の活性化が主目的で、「スポーツイベントはそのための手段と考えるべきだ」という提案をしてきて、今年は25回目のトライアスロン山形大会を迎えています。

要は、スポーツイベントを目的化するのではなく、そこから地域の活性化にどうつなげるのかが目的にならないと意味がありません。そのことをスポーツボランティアリーダーがしっかり認識し、その地域の中に参加者・訪問者を受け入れていくようなシステムを作らなければなりません。

山口

スポーツツーリズムはこれから爆発します。また「地域の活性化が目的かなのか、イベントの開催が目的か」は、町によって、あるいは大会の開催趣旨によって違ってきます。もともと地域活性を目指してウォーキングイベントを成功させた事例もありますし、スポーツイベントの開催がメインでうまくいった場合もあります。

渡邊 先ほど、スポーツボランティア・スポーツ振興組織・スポーツボランティアをコーディネートする組織の方々から、声高らかに「スポーツボランティア宣言」が発表されました。この宣言を一つの証に、笹川スポーツ財団は、全国にスポーツボランティア文化が定着するよう、全力を挙げて取り組むことを約束します。

振り返れば、2002年から駆け足でスポーツボランティアの育成を行ってきましたが、私たちには「大きな目的」が二つありました。

一つは、世界にあって日本にはない、「社会貢献につながる大規模マラソン」を大都市・東京で開催するということでした。SSFスポーツボランティアリーダーの活躍もあり、東京マラソンは既に4回開催されましたが、残念ながら、社会貢献、チャリティーという大きな課題が未達成のままとなっています。

もう一つの大きな目的は、スポーツボランティア文化を醸成し、日本に定着させ、スポーツ先進国の仲間入りをするということです。そのために、走りながらではありますが、ボランティアリーダーの養成研修やスキルアップ研修、あるいはスポーツイベントでの実践を推進してきたのです。

2008年の全国スポーツ実態調査では、ボランティア実施率は約7%。この数字は、調査を開始して十数年間ほぼ横ばいです。一方、ボランティアをやってみたいという希望者は約20%でした。どちらも高い数字ではありませんが、これは、ボランティア活動を希望する方とボランティアを求める組織との「マッチング」が上手くいっていないことが原因ではないでしょうか。

今まで私たちは、第一ステージとしてスポーツボランティア文化を醸成する活動を率先垂範して行ってきましたが、これからは第二ステージに入ります。その第二ステージに入る起点が、今日のスポーツボランティア・リーダーサミットだと考えています。

これからは、全国のボランティア登録状況や稼働状況、活動評価などをつぶさに調べ上げます。そして、日本にスポーツボランティア文化を醸成し定着させるためには、どういう戦略を立て実践すべきかをしっかりと研究します。

それを足掛かりに、全国のスポーツボランティア組織やスポーツ振興組織と太いネットワークを結び、さまざま連携・協力しながら、日本のスポーツボランティア文化の醸成、定着を推進したいと思います。

私たちは、皆さんと同志です。本日を契機に、さらに一致団結して、日本を元気にするために、この活動を展開していただくことを心からお願いいたします。

(終了)